



2024年度 第1回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果

今後の見通し(2024年8月～12月)のポイント

海況

黒潮はA型^(※1)基調で推移する。

沿岸水温は、潮岬以西は概ね「平年並」^(※2)～「高め」^(※2)、熊野灘～遠州灘～相模湾は「平年並」～「高め」で暖水波及時に「極めて高め」^(※2)、伊豆諸島海域は概ね「やや高め」^(※2)～「極めて高め」、房総～常磐南部海域は「平年並」～「やや高め」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

A型：流路南端が北緯32度以南

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、やや高め=平年値+1.0℃程度。

高め=平年値+1.5℃程度、極めて高め=平年値+2.5℃以上、
ただし、鹿島灘～常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況(来遊量予測)

マイワシ

前年並～下回る海域が多い。

カタクチイワシ

前年並～上回る海域が多いが、引き続き低水準。

ウルメイワシ

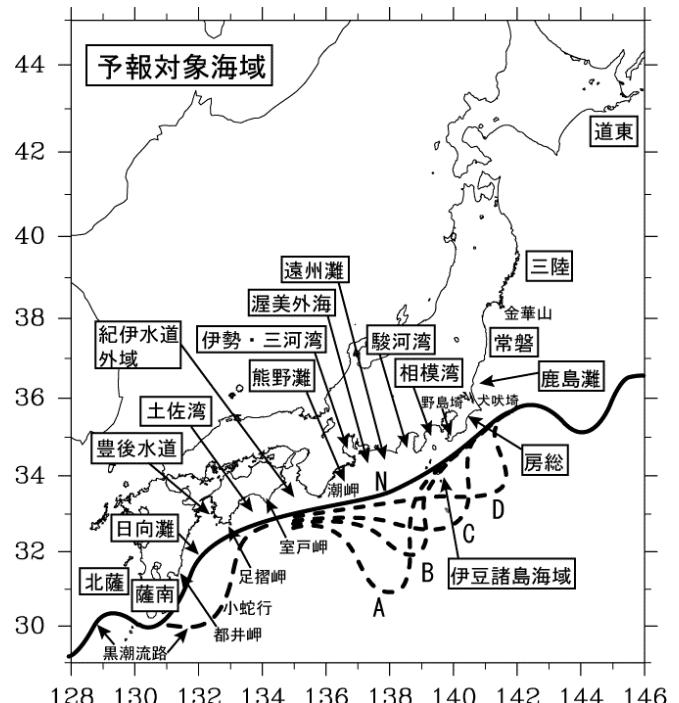
前年並～下回る海域が多いが、日向灘および豊後水道西側南部では前年を上回る。

マアジ

前年を上回る海域が多い。

マサバ・ゴマサバ

マサバは低調であった前年並～下回る、
ゴマサバは引き続き低水準で前年並～下回る。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当

漁況：浮魚資源部（横浜） 大島、由上、上村、井元、渡部、日野、木下

海況：海洋環境部（横浜） 亀田、安倍

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2024年8月～12月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、9月まで離岸傾向で推移し、その後接岸傾向となる。
- ・足摺岬沖では、離岸傾向で推移するものの、一時的に接岸傾向となることがある。
- ・室戸岬～潮岬沖では、離岸傾向で推移するものの、8月に一時的に接岸することがある。

◎潮岬以東

- ・大蛇行が継続し、A型基調で推移する。
- ・蛇行北上部は、概ね伊豆諸島海域の西側に位置する。
- ・犬吠埼沖では、沖合の冷水渦の接近に伴い離岸することがある。

(2) 薩南～房総海域

- ・潮岬以西は、一時的に黒潮系水が波及する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、黒潮の接近や黒潮系水の波及に伴い暖水に覆われる。
- ・伊豆諸島海域は、概ね暖水に覆われる。
- ・房総沖は、冷水渦の接近時以外は黒潮からの暖水に覆われやすい。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・断続的に黒潮による暖水が波及する。

(4) 沿岸水温

- ・薩南～室戸岬は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・紀伊水道外域では、「低め」～「平年並」だが、夏季は「平年並」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・伊豆諸島海域は、「やや高め」～「極めて高め」で推移するが、八丈島周辺では一時的に「平年並」となることがある。
- ・房総海域～常磐南部海域は、「平年並」～「やや高め」で推移する。

※ 平年並=平年値±0.5°C程度、（やや高め、やや低め）=平年値±1.0°C程度、

（高め、低め）=平年値±1.5°C程度、（極めて高め、極めて低め）=平年値±2.5°C以上

（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並=平年値±1.5°C程度、（やや高め、やや低め）=平年値±1.6～3.9°C程度、

（高め、低め）=平年値±4.0～6.0°C程度、（極めて高め、極めて低め）=平年値±6.1°C以上）

経過 (2024年3月～2024年7月) (注: 経過は図2を参照のこと)

(1) 黒潮

- ・A型流路の大蛇行が継続した。
- ・3月～4月にかけて、小蛇行の発達・東進に伴い都井岬沖～遠州灘沖で大きく離岸した。
- ・4月上旬、蛇行北上部が伊豆諸島海域でS字状となり、青ヶ島の南側を迂回した。
- ・5月～7月にかけて、典型的な大蛇行流路をとった。
- ・7月上旬に、九州南東沖で小蛇行が発生した。
- ・房総沖では、期間を通じて接岸傾向で推移した。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁は、3～4月は「平年並」、5月は「接岸」、6～7月は「離岸」で推移した。

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、3～4月は「著しく離岸」、5～6月は「接岸」～「やや離岸」、7月は「著しく離岸」で推移した。
- ・足摺岬沖では、3月は「著しく離岸」、4～5月中旬は「やや離岸」～「著しく離岸」、その後は「接岸」で推移した。
- ・室戸岬沖では、3～5月中旬は「かなり離岸」～「著しく離岸」、5月下旬～6月に「かなり離岸」で推移した。
- ・紀伊水道外域では、3月上旬、4月下旬、5～6月中旬に黒潮北縁から暖水が波及した。

◎潮岬以東

- ・遠州灘～熊野灘では、断続的に暖水が波及した。
- ・駿河湾、大島西水道へ向けて断続的に暖水が波及した。
- ・伊豆諸島海域では、黒潮は4月上旬に青ヶ島の南からS字状に北上した。
- ・黒潮は三宅島～御蔵島付近を北東～東向きに流れた。
- ・野島崎沖では、黒潮は接岸傾向で推移した。
- ・犬吠埼沖では、黒潮は一時的な離岸が見られたが、概ね接岸傾向で推移した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮系暖水の影響が断続的にみられた。

現況 (2024年7月30日現在)

(1) 黒潮

- ・A型流路であり、大蛇行が継続している。
- ・小蛇行の発達に伴い、都井岬沖で大きく離岸している。
- ・遠州灘沖で 30.5°N 付近まで南下した後、石廊崎沖を北上し、三宅島付近を北東へ流れている。

(2) 薩南～房総海域

◎潮岬以西

- ・黒潮は、都井岬沖で「著しく離岸」している。
- ・黒潮は、足摺岬～室戸岬～潮岬沖で「かなり離岸」している。

◎潮岬以東

- ・熊野灘～遠州灘沖に、黒潮系暖水がみられる。
- ・伊豆諸島海域は、暖水に覆われている。
- ・犬吠埼沖で「やや離岸」している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・冷水域がみられる。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

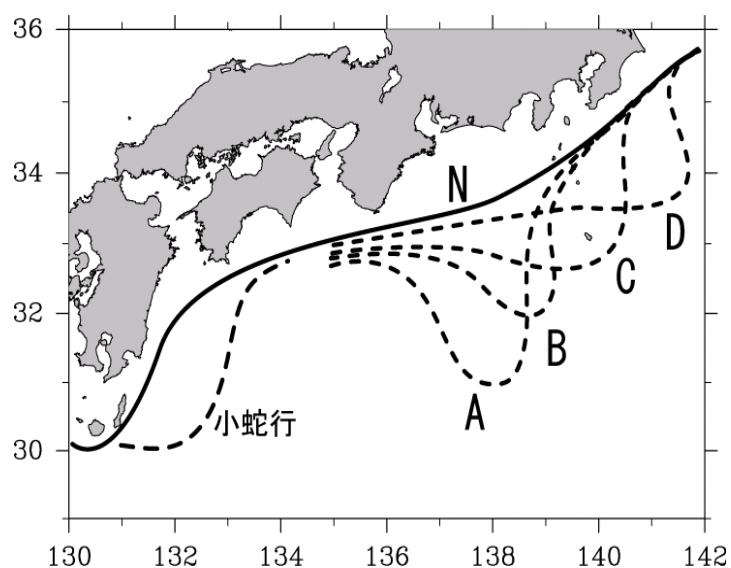


図1 黒潮流型の分類

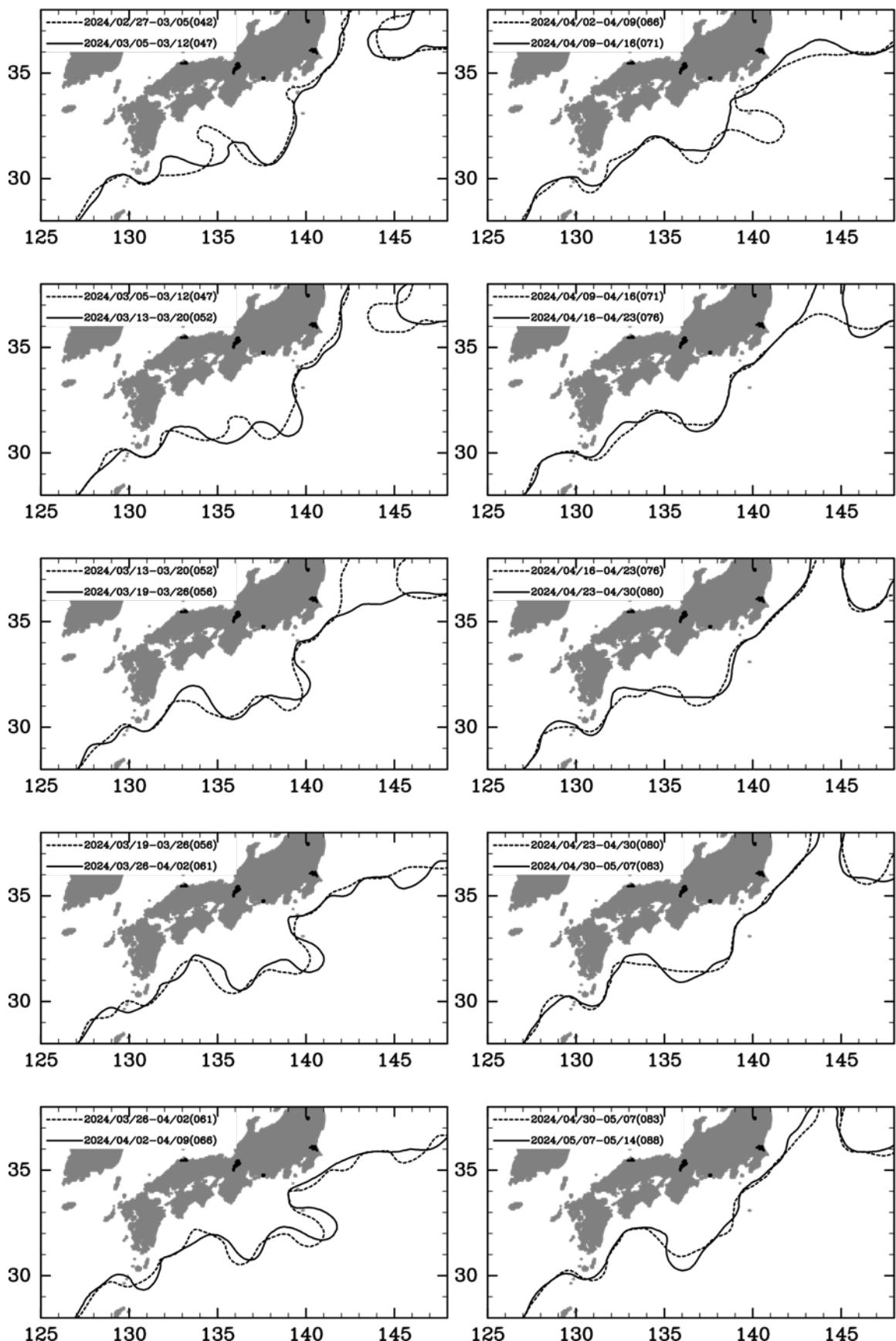


図2 黒潮流軸のパターン
(2024年3月～2024年5月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

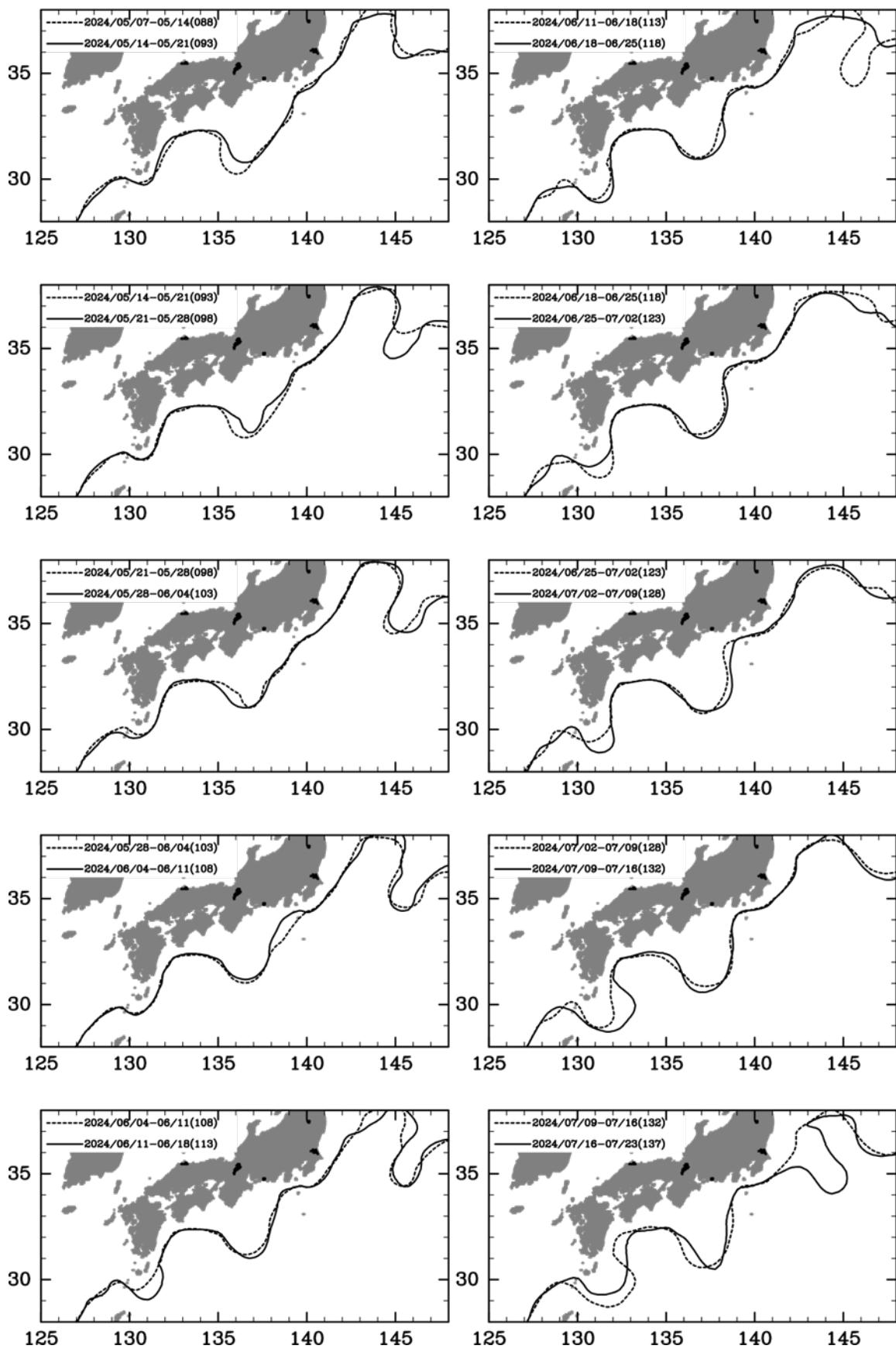


図2(つづき) 黒潮流軸のパターン
(2024年5月～2024年7月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2024年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2024年級群）、1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）、3歳魚（2021年級群）、4歳以上（2020年級群以上）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：北薩海域では前年を上回る。日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側では前年を上回る。豊後水道中南部東側では前年を下回る。宿毛湾・土佐湾では前年を上回る。紀伊水道外域では前年並。熊野灘では低水準。
- (2) 漁期：豊後水道中南部東側では7月～8月が主漁期となる。その他の海域では期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：8cm～16cm前後の0歳魚主体に漁獲され、15cm以上の1歳以上が混じる。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

- (1) 来遊量：伊勢・三河湾～相模湾では前年並。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：10cm～15cm前後の0歳魚主体に漁獲される。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：まき網は、8月～10月は道東海域が主漁場となり、三陸～房総海域は小規模な漁場形成となる。11月～12月には三陸～常磐海域においても散発的に漁獲される。定置網は、各地で期を通じて散発的に漁獲される。
- (3) 魚体：10cm～15cm前後の0歳魚、13cm～17cm前後の1歳魚、15cm～18cm前後の2歳魚、16cm～20cm前後の3歳魚、17cm～21cmの4歳魚が漁獲される。房総海域で漁期前半に漁獲される0歳魚は16cm～17cm主体。

漁況の経過（2024年4月～6月）および見通し（2024年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入り急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014年には100万トンを上回った。その後も良好な加入が続いたことにより資源量はさらに増加して、2022年は491万トンと推定された（2023年度資源評価）。

2020年級群（4歳魚）は、加入量が784億尾と推定されており、最近10年（以下、近年）において最も

高い加入量（883 億尾）と推定された 2018 年級群を下回るもの、比較的高い値となっている。2023 年における 3 歳魚としての漁獲状況は前年を下回った。2020 年級群の推定残存資源量は 2019 年級群の同時期を下回っている。

2021 年級群（3 歳魚）は、加入量が 689 億尾と推定されており、2020 年級群と同程度の加入水準となっている。2023 年における 2 歳魚としての漁獲状況は、前年を下回った。2021 年級群の推定残存資源量は、2020 年級群の同時期を下回っている。

2022 年級群（2 歳魚）は、加入量が 582 億尾と推定されており、2021 年級群と同程度の加入水準となっている。2023 年における 1 歳魚としての漁獲状況は、前年を下回った。2022 年級群の推定残存資源量は、2021 年級群の同時期と同程度である。

2023 年級群（1 歳魚）について、2023 年における 0 歳魚としての漁獲状況（主に西日本海域）は、前年を下回っていた。一方、沖合域においては、5 月～6 月の移行域幼稚魚調査（水産資源研究所）および 6 月～7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）において前年を下回る CPUE（Catch Per Unit Effort：単位努力量当たり漁獲量）が見られ、9 月～10 月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所）に基づく加入量指数は前年を下回った。現時点では不確実であるが、2023 年級群の加入量は前年を下回る水準と考えられる。

2024 年級群（0 歳魚）に対応する 2024 年の産卵量は、283 兆粒（2024 年 6 月までの暫定値）であり、2023 年（1,023 兆粒）を大きく下回った。マシラスとしての漁獲は、渥美外海においては低調であった前年を上回っているものの、駿河湾においては前年を下回っている。一方で、西日本の海域における未成魚としての漁獲は前年を上回っている。沖合域の調査（5 月～6 月の移行域幼稚魚調査と 6 月～7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査）では、前年並～下回る漁獲が見られている。これらの情報から現時点では不確実であるが、近年は沖合加入群が資源の主体となっていることを踏まえ、2024 年級群の加入量は、前年を下回る水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

（1）北薩～熊野灘（まき網、定置網）

北薩～熊野灘での 2024 年 4 月～6 月（以下、前期）の漁獲量は 5,330 トンと前年同期（1,762 トン）を大きく上回った。特に北薩海域および豊後水道南部西側において前年を大きく上回る漁獲となっていた。（漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値）

・来遊量：近年の漁獲状況から、今期の主な漁獲対象は 0 歳魚（2024 年級群）であり、1 歳（2023 年級群）以上が混じる。

北薩～薩南海域では、前期の漁獲状況が前年を大きく上回り、当歳魚の加入もみられることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

日向灘では、6 月を除いてまとまった漁獲がなく、前期の漁獲状況は前年を大きく下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、前期の漁獲状況が前年を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道中南部東側では、前期の漁獲状況が前年同期を大きく下回っていることから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、前期のシラス漁の漁況から0歳魚の発生は前年と同様に低水準と考えられるが、中型まき網の漁況は前年を上回っていたことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、成魚を漁獲する漁業が少ないため、漁況から来遊量を予測することは難しいが、近年の傾向から来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、8月～12月の1そうまく網での漁獲量は少ない傾向にあり、前期の棒受網の漁獲量も少なかったことから、今期の来遊量は低水準であった前年並と予測される。

熊野灘では、4月と5月の主要定置網での漁獲がなく、中型まき網では前期に0歳魚がほとんど漁獲されていないことから、本海域への加入量は極めて少ない可能性が高く、来遊水準は低水準と予測される。

- ・漁期：豊後水道中南部東側では7月～8月が主漁期となる。その他の海域では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、主体となる0歳魚は8cm～16cm前後、1歳以上は15cm以上。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

伊勢・三河湾～相模湾での前期の漁獲量は7,426トンと前年同期（359トン）を上回った。

- ・来遊量：近年の漁獲状況から、今期の主な漁獲対象は0歳魚（2024年級群）である。

伊勢・三河湾、渥美外海では、前期のマシラス漁獲量と今期のマイワシ漁獲量の関係から前年を下回ると予測されているものの、前期のマシラスの来遊状況から今期は追加の加入群が来遊すると考えられ、漁期が長期化する可能性があることから、今期の来遊量は前年並と予測される。

駿河湾、相模湾西部では、0歳魚が漁獲の主体となる。近年の傾向から、5月、6月に漁獲されていた資源が引き続き漁獲対象になると予測され、前年同様に低水準であったことから今期の来遊量は前年並と予測される。

相模湾東部では、前期のマシラス漁獲量は高水準であったものの、近年はマシラス漁獲量と8月～12月の漁獲量の相関が弱くなっていること、および近年の夏季以降の漁獲量は低水準であることから、今期の来遊量は低水準である前年並と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、主体となる0歳魚は10cm～15cm前後。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

房総以北海域のまき網での前期の漁獲量は9.2万トンであり、前年同期（10.4万トン）並であった。漁場は犬吠埼周辺海域～三陸南部であった。6月上旬からは三陸北部海域でも形成され、6月下旬以降、道東海域での操業が始まっている。房総以北海域の定置網等での前期の漁獲量は1.6万トンとなり、前年同期（3.9万トン）を下回った。

- ・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は、2歳魚（2022年級群）、3歳魚（2021年級群）が主体となり、主に道東海域において8月～10月に漁獲される。0歳魚（2024年級群）は、房総海域におけるまき網や定置網および三陸南部海域の定置網で漁獲され、常磐以北のまき網では漁期終盤

に漁獲される。

資源状態を反映して、1歳以上の来遊量は前年を下回ると考えられる。漁期終盤に常磐以北で漁獲される0歳魚の来遊量は、現状ではかなり不確実であるが、現在得られている沖合域調査の結果から前年を下回る水準と考えられる。また、房総海域で主に漁期前半に漁獲される0歳魚は、1月～6月の潮岬～房総海域における産卵量と房総海域における黒潮離岸状況から、来遊量は前年を下回ると予測される。さらに、黒潮続流の北偏傾向が今後も継続した場合、マイワシの南下回遊が遅れると考えられ、漁期終盤の三陸～房総海域における南下群の来遊量は低水準になると予測される。以上のことから、全体としての来遊量は前年を下回ると予測される。

- ・漁期・漁場：近年および直近の魚群の来遊状況から、まき網は、8月～10月は道東海域が主漁場となり、三陸～房総海域は小規模な漁場形成となる。11月～12月には三陸～常磐海域においても散発的に漁獲される。定置網は、各地で期を通じて散発的に漁獲される。

- ・魚体：近年の出現状況から、0歳魚は10cm～15cm前後、1歳魚は13cm～17cm前後、2歳魚は15cm～18cm前後、3歳魚は16cm～20cm前後、4歳魚は17cm～21cm。なお、房総海域で主に漁期前半において漁獲対象となる0歳魚は、直近の出現状況から16cm～17cm主体。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2024年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2024年級群）、1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

- (1) 来遊量：西薩～土佐湾、紀伊水道外域東部では予測が困難。紀伊水道外域西部では前年並～上回る。伊勢湾、渥美外海では前年並。遠州灘～駿河湾では8月は前年を上回るが、9月以降は予測困難。相模湾では前年並～下回る。鹿島灘～常磐南部海域では前年並。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。

2. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：北薩～薩南海域は前年を下回る。日向灘～豊後水道では前年を上回る。宿毛湾では前年を下回る。紀伊水道外域西部では前年並～上回る。紀伊水道外域東部では主たる漁獲対象ではない。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：10cm以下の0歳魚主体に、10cm以上の1歳以上が漁獲される。

3. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

- (1) 来遊量：熊野灘ではまとまった漁獲がない。伊勢・三河湾、相模湾では前年並。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：10cm以下の0歳魚主体に、10cm～14cmの1歳以上が漁獲される。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：房総海域では漁獲主体となる0歳魚は予測が困難、1歳以上は前年を上回る。三陸南部海域～仙台湾では前年を上回る。三陸北部海域ではまとまった漁獲はない。道東海域では主たる漁獲対象とならない。
- (2) 漁期・漁場：房総海域の2そうまき網、三陸南部海域～仙台湾の定置網では期を通じて漁獲される。道東海域および常磐～房総海域の1そうまき網では主な漁獲対象にはならない。
- (3) 魚体：6cm～8cm主体の0歳魚、10cm～12cm主体の1歳以上が漁獲される。

漁況の経過（2024年4月～6月）および見通し（2024年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、2002年の291万トンをピークに減少傾向に転じ、2018年に9.5万トンの最小値となった後、増加に転じて2022年は24.7万トンと推定された（2023年度資源評価）。資源動向は親魚量の最近5カ年の推移から増加傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2023年度資源評価に基づくと、2022年級群（2歳魚）の加入量は215億尾と推定され、2021年級群の

加入量の約半分と推定された。2023年における1歳魚としての漁獲状況は前年並であった。これらのことから、2022年級群の残存資源量は、2021年級群の同時期を下回ると推測される。

2023年級群（1歳魚）は、シラスや0歳魚として主産卵場である東海海域を中心に7月以降に漁獲され、2023年におけるその漁獲量は前年並であった。水産資源研究所が実施している沖合域の調査船調査では、2024年6月～7月における北西太平洋北上期浮魚類資源調査（以降、北上期調査）の推定1歳以上のCPUE（全測点の平均CPUEで速報値。以下同様）は前年と同程度の低水準であった。これらのことから、2023年級群は2022年級群と同程度の低い加入量であり、残存資源量も同程度であると推測される。

2024年級群（0歳魚）は、2024年1月～6月までの産卵量（I～IV区の合計）が1,546兆粒であり、前年同期（1,586兆粒）並であったが、主要港における4月～6月のカタクチイワシシラス水揚量は前年を下回った。2024年の北上期調査における推定0歳魚CPUEは前年を上回ったが依然として低水準であった。これらのことから、現時点では不確実であるが、2024年級群の加入量は2023年級群と同程度と推測される。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

（1）西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

・来遊量：西薩～土佐湾、紀伊水道外域東部では、シラスの漁場形成については予測が困難である。

紀伊水道外域西部では、瀬戸内海東部海域で孵化したシラスを漁獲することになるが、当該海域の卵及び仔魚が前年よりも多いことから、来遊量は前年並～上回ると予測される。

伊勢湾、渥美外海では、4月～6月の漁獲量は前年を下回ったが、7月に入り、内湾に漁場が形成されつつある。湾内の産卵水準は高く、湾外へ流出した湾内水が遠州灘方面に流れる海況となれば、外海での漁場形成が期待できるため、前年並と予測される。

遠州灘～駿河湾では、潮岬～遠州灘西部（伊勢・三河湾内を除く）における5月～6月のカタクチイワシ産卵量（卵稚仔調査）と7月～8月の主要6港シラス水揚量には正の関係がある。2024年5月～6月の産卵量は24兆粒であり、この関係式に基づくと7月～8月のシラス水揚量は前年を上回ると予測される。9月以降については、現時点では情報が無いため予測が困難である。

相模湾では、周辺海域（相模湾および東京湾口）で1月～6月に実施した卵稚仔調査では、カタクチイワシ卵の平均採集量は84.6粒であり、前年（79.7粒）及び平年（過去5年平均で77.6粒）と同程度の水準であった。3月～6月の漁獲量やその動向は前年同様に推移しており、7月以降は上向くことが予想されるが、前年10月のような豊漁があるかは不明である。そのため、来遊量は前年並～下回ると予測される。

鹿島灘～常磐南部海域では、沿岸のカタクチイワシの卵仔魚の採集数が6月、7月と増加傾向にあり、新たなシラス資源の供給が確認されている。また、2018年以降8月～12月は暖かい海況が継続しており、漁況も安定している。今期も本海域の海況に大きな変化が起こらないと見込まれることから、来遊量は前年並と予測される。

・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

（2）北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

・来遊量：北薩～薩南海域では、今期の漁獲主体となる0歳魚（2024年級群）は、4月～6月の水揚量が前

年を下回っていることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

日向灘では、2010 年以降、今期の漁獲対象は沿岸発生群主体の 0 歳魚となっている。7 月～12 月の宮崎県まき網漁獲量は、1 月～6 月の宮崎県北中部シラス漁獲量、大分県まき網漁獲量および高知県まき網漁獲量の相乗平均値と正の関係にあり、この予測値が前年の宮崎県の漁獲量を上回ることから、来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、0 歳魚が水揚げの主体であった 4 月～6 月の水揚量が前年を上回った。期前半はマイワシやウルメイワシに混じって漁獲されることがあるため水揚量に反映されない可能性があるが、来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道東側では、周辺海域で発生したと推定される被鱗体長 10 cm 以下の 0 歳魚が漁獲の主体となる。カタクチシラスの水揚量およびカタクチイワシのまき網での水揚量が前年同期を大幅に上回ったことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾では、期を通じて 0 歳魚、1 歳（2023 年級群）以上が漁獲の対象となる。上半期（1 月～6 月）の宿毛湾小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量と下半期（7 月～12 月）の中型まき網水揚量には有意な正の関係が見られる。上半期の宿毛湾小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量とこの正の関係式から予測される下半期の中型まき網水揚量は前年を下回ることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、近年の漁獲傾向から、前年並～上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではない。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：10 cm 以下の 0 歳魚主体に、10 cm 以上の 1 歳以上が漁獲される。

（3）熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：熊野灘では、例年、マイワシなどにわずかに混じって漁獲されることが多い。今期もまとまとった来遊はないと予測される。

伊勢・三河湾では、7 月現在、体長 10 cm 程のカタクチイワシが漁獲されているが、それに続く 8 cm 未満の個体は少ないため、湾内の資源量は前年並の水準と考えられる。また、7 月現在、湾内のシラス漁場は小規模で、春、夏生まれのシラスの生残が良くないと推察される。今期の漁獲主体は春、夏生まれの湾内発生群であることから、来遊量は前年並と予測される。

相模湾西部では、例年、8 月以降の定置網への入網は僅かであり、さらに近年は資源量が少ないため予測は困難である。ただし、近年の 8 月～12 月は低調な水揚げが続いていることから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

相模湾東部では、黒潮 A 型流路が継続している 2018 年以降、主要定置網の 8 月～12 月漁獲量は数トンのレベルに留まっている（秋季に一時的に B 型となった 2020 年を除く）。JCOPE2M による黒潮長期予測（7 月 3 日発表）によると、大蛇行は少なくとも 9 月まで継続すると予測されており、今期も近年同様の不漁傾向が継続すると考えられる。以上のことから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：10 cm 以下の 0 歳魚主体に、10 cm～14 cm の 1 歳以上が漁獲される。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総海域では、近年は0歳魚を主体に1歳以上が漁獲される。0歳魚（2024年級群）は、期後半に漁獲され、8月を中心に関東灘周辺海域で発生する加入群に由来すると考えられるが、現時点での情報がないため、来遊量の予測は困難である。1歳魚（2023年級群）は、近年、大部分が8月に北上し、9月以降は徐々に漁獲されなくなる傾向にある。6月までの1歳魚の来遊量は前年を上回っていると考えられるため、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。2歳（2022年級群）以上は1歳魚に混じる程度と考えられるため、来遊量は前年同様の低水準と予測される。全体として、今期の漁獲主体は0歳魚であることから、来遊量の予測は困難である。

常磐海域では、2017年3月以降、茨城県での水揚げがないため、来遊量の予測は困難である。1そうまき網は、サバ類やマイワシを周年漁獲対象としているため、まとまった漁獲はない。

三陸南部海域～仙台湾では、9cm～12cmの1歳魚、および0歳魚が漁獲の主体となり、定置網で断続的な漁獲がある。冬春季の宮城県沿岸は平年（過去30年平均）よりも高水温（江島定地水温の平年値との比較で+4°C～7°C）となったことで断続的な漁獲が見られ、3月～6月の漁獲量が前年を大きく上回った。また、千葉県の2そうまき網漁業で前年を上回る漁獲が続いているため、これらのカタクチイワシが8月以降に本海域に来遊し、漁獲対象となることが見込まれるため、来遊量は前年を上回ると予測される。

三陸北部海域では、近年の資源状態及び漁獲動向から、まとまった漁獲はない。

道東海域では、2021年以降、道東沖の釧路水産試験場による調査船調査でまとまった量のカタクチイワシが漁獲される事例が増えている。また、2023年には、まき網船によるカタクチイワシの漁獲が9年ぶりに記録された。道東太平洋海域への来遊量は増加傾向にあると推測されるものの、マイワシの来遊量が依然として多いため、カタクチイワシは漁業の主対象とはならないと予測される。

・漁期・漁場：房総海域の2そうまき網および三陸南部海域～仙台湾の定置網では期を通じて漁獲される。資源量が多い年には、道東海域のまき網では8月～10月に、房総・常磐海域の1そうまき網では12月以降に漁場が形成されていたが、資源量の少ない近年は主な漁獲対象にはならない。

・魚体：6cm～8cm主体の0歳魚、10cm～12cm主体の1歳以上が漁獲される。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2024年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2024年級群）、1歳（2023年級群）以上。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

- (1) 来遊量：北薩・薩南海域では前年を下回る。日向灘および豊後水道西側南部では前年を上回る。豊後水道東側南部および宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域では前年並～下回る。熊野灘では前年を下回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：0歳魚（8cm～20cm）が主体となる。海域により1歳以上（20cm以上）も対象となる。

漁況経過（2024年1月～6月）および見通し（2024年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

太平洋および瀬戸内海における漁獲量（農林統計）は、2015年に4.9万トンと過去最高となったが、2016年以降から減少傾向に転じ、2020年には2.4万トンとなった。2021年に3.9万トンと一時的に増加したが、2021年に2.2万トンとなり、2023年の漁獲量暫定値は2.8万トンであった。卵稚仔調査で得られる卵密度データを標準化した資源量指標値（平均値を1とする相対値）は、2016年に1.92と過去最高となり、2017年～2019年は1.39～1.62と比較的高い水準で推移した。しかし、2022年は0.47と大きく減少した。これらのことから、令和5（2023）年度の資源評価においては、資源は減少傾向にあると判断されている。

2024年の資源量指標値は未推定であるが、資源量指標値の基礎となる太平洋および瀬戸内海（海区I～海区III、海区VII）の産卵量（前年9月～当年8月を1年とする）は、2016年～2023年にかけて減少傾向を示しながら35兆粒～205兆粒の間で推移している。2023年9月～2024年6月の産卵量は34兆粒であり、過去最低値となった前年同期（2022年9月～2023年6月、31兆粒）を上回ったものの、過去2番目に低い値となっている。以上のことから、親魚資源は依然低い水準にあると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

例年の傾向から、2024年後期（8月～12月）の漁況は0歳魚（2024年級群）が主体になると推測される。予測対象海域（鹿児島県～三重県）の主要港における前期（1月～6月）水揚量と後期水揚量には正の関係がある。2024年前期の水揚量は6,016トンであり、前年同期（5,181トン）を上回った。2000年～2023年の前期水揚量と後期水揚量との関係を用いて、2024年前期の水揚量から2024年後期の水揚量を予測すると12.3千トンとなる。この値は2023年後期の水揚量16,892トンを下回る。ただし、近年の実測値は予測値を上回る傾向がみられている。

北薩～薩南海域では、0歳魚、1歳魚（10cm～17cm）が漁獲対象となる。4月～6月のまき網における1～2歳魚の漁獲量は前年を上回って推移しているが、棒受網における0歳魚の漁獲量は前年を下回って推移している。以上のことから来遊水準は前年を下回ると考えられる。

日向灘では、0歳魚、1歳魚（11cm～20cm台）が主体となる。7月～12月の漁獲量と、指標値（鹿児島県まき網1月～5月漁獲量、大分県まき網1月～6月漁獲量の相乗平均）との間に正の関係が認められ、2024年の予測値が前年を上回っていることから、来遊水準は前年を上回ると予測される。

豊後水道西側南部では、8月～10月は0歳魚（10cm～20cm）が主体となる。4月～6月のまき網水揚量が前年を上回ったことから、来遊水準は前年を上回ると予測される。

豊後水道東側南部では0歳魚が主体となる。加入時期にあたる4月～6月と当歳魚が水揚げの主体となる8月～12月において、両期間の水揚量には正の相関関係が認められる。この関係から判断すると来遊水準は前年同期を下回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、0歳魚、1歳魚が漁獲される。宿毛湾の中型まき網における前期水揚量と7月～12月の水揚量との間には正の関係が認められ、この関係から来遊水準は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、近年の漁獲傾向から、来遊水準は前年並～下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、1そうまくき網による漁獲は近年無い。2024年4月～6月の棒受網の漁獲量は前年並となった。これらのことから、8月～12月の来遊水準は前年並と予測される。

熊野灘では0歳魚（8cm～20cm）が主体となり1歳以上（18cm以上）も漁獲される。2024年は定置網における5月、6月の漁況が0歳魚主体に前年を大幅に下回っているため、来遊水準は前年を下回ると予測される。なお、熊野灘のまき網では、例年漁獲優先順位は高くないが、ここ数年の記録的な不漁状況下では本種に対する狙い操業が増加し、漁獲圧が高まる可能性がある。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2024年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2024年級群）、1歳魚（2023年級群）、
2歳魚（2022年級群）、3歳（2021年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年を上回る。日向灘では前年を上回る。豊後水道南部西側では前年を上回る。豊後水道東側では前年を下回る。宿毛湾・土佐湾では前年を上回る。
- (2) 魚体：北薩～薩南海域では0歳魚、1歳魚主体。日向灘、豊後水道では0歳魚が主体。宿毛湾・土佐湾では0歳魚、1歳魚が主体。0歳魚は19cm以下、1歳魚は19cm～25cm、2歳以上は23cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：紀伊水道外域西部では前年を上回る。紀伊水道外域東部では前年並。熊野灘では前年並～上回る。
- (2) 魚体：紀伊水道外域西部では0歳魚主体。紀伊水道外域東部では0歳魚、1歳魚主体。熊野灘では1歳魚主体に0歳魚および2歳以上が混じる。0歳魚は19cm以下、1歳魚は19cm～25cm、2歳魚は23cm～27cm、3歳以上は25cm以上。

3. 相模湾（定置網）

- (1) 来遊量：伊豆東岸では前年を上回る。西湘では豊漁だった前年を下回る。
- (2) 魚体：主体となる0歳魚は19cm以下、1歳魚は19cm～22cm。

漁況の経過（2024年1月～6月）および見通し（2024年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降は減少傾向に転じ、2015年には4.4万トンまで減少した。その後は横ばい傾向を示している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降3.2億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。令和5年度（2023年度）資源評価において、2022年の資源量は5.6万トン、親魚量は2.6万トンと推定された。

2021年級群（3歳魚）の加入量は3.9億尾と推定され、2022年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。

2022年級群（2歳魚）の加入量は6.5億尾と推定された。2023年前半の漁獲の主体となったが、2023年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。

2023年級群（1歳魚）は、0歳魚時（2023年1月～12月）の漁獲尾数は289百万尾と、前年同期（127百万尾）を上回り、1歳魚時（2024年1月～6月）の漁獲尾数（主要港集計、暫定値）も41百万尾と、前年同期（主要港集計、32百万尾）を上回った。加入量の指標となる0歳魚時の漁獲状況は、宿毛湾まき網ゼンゴCPUE、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量（いずれも2023年4月～2024年3月）において前年を上回ったが、宇和島港まき網ゼンゴCPUE（2023年4月～2024年3月）、千葉県定置網当歳魚漁獲量（2023年10月～2024年3月）では前年並、宮崎県南部定置網アジ仔CPUE（2023年4月～6月）、串本棒受網当歳魚漁獲量（2023年5月～6月）、伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量（2023年4月～2024年3月）では前年を下回った。加入量指標値は2022年級群を下回るもの、漁獲尾数が大きく増えていることから2023年級群の加入量は前年を上回ると考えられる。

2024 年級群（0 歳魚）は 2024 年 1 月～6 月の漁獲尾数（主要港集計、暫定値）は 8 百万尾と、前年同期（主要港集計、14 百万尾）を下回った。各県地先の 0 歳魚の漁獲状況を 4 月～6 月で比較すると、宮崎県南部定置網アジ仔 CPUE、宇和島港まき網ゼンゴ CPUE、伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量は前年を上回ったが、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量は前年並、宿毛湾まき網ゼンゴ CPUE、串本棒受網当歳魚漁獲量（5 月～6 月）は前年を下回った。現時点での見積もりは不確実であるが、2024 年級群（0 歳魚）の加入量は 2023 年級群並～下回る水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0 歳魚（2024 年級群）：19 cm 以下、1 歳魚（2023 年級群）：19 cm～25 cm、2 歳魚（2022 年級群）：23 cm～27 cm、3 歳（2021 年級群）以上：25 cm 以上。3 歳以上の年齢に対応した体長区分は現状では困難である。なお近年の報告によると、相模湾以東では尾叉長 20 cm 台に 3 歳から 10 歳以上の高齢魚がみられることが明らかになってきている。

（1）北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、0 歳魚（2024 年級群）、1 歳魚（2023 年級群）が漁獲の主体となる。2024 年 4 月～6 月のまき網漁業における漁獲動向から、今期（8 月～12 月漁期）の来遊量は前年を上回ると考えられる。

日向灘では、0 歳魚が漁獲の主体となる。0 歳魚の漁獲量は日向灘南部大型定置網アジ仔 CPUE、宇和海中部まき網漁獲量、大分県まき網漁獲量を用いた指標値と正の関係が認められ、この関係から判断して今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、0 歳魚が漁獲の主体となる。0 歳魚、1 歳魚が水揚げの主体であった 2024 年 4 月～6 月のまき網水揚量が前年を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道東側では、0 歳魚が漁獲の主体となる。5 月～6 月と 8 月～12 月の漁獲量には正の関係が認められ、この関係から判断すると今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では 0 歳魚、1 歳魚が主体となる。中型まき網で 0 歳魚の来遊が前年より多いことから、来遊量は前年を上回ると考えられる。

（2）紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、0 歳魚（2024 年級群）が漁獲の主体となる。近年の漁獲傾向から、前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、0 歳魚、1 歳魚（2023 年級群）が主体で漁獲されると考えられる。2024 年 1 月～6 月の漁獲量は、前年を下回り、5 月、6 月に漁獲されなかったことから、今期の漁獲量も少ないと考えられるので、来遊量は前年並と予測される。

熊野灘では、1 歳魚主体に 0 歳魚および 2 歳（2022 年級群）以上が混じる。前期のまき網の漁況から 1 歳魚の来遊量は前年並であり、0 歳魚については定置網の漁況から前年を上回ると考えられる。以上から、来遊量は前年並～上回ると予測される。

（3）相模湾

伊豆東岸では、0 歳魚（2024 年級群）が漁獲の主体となる。1 月～6 月の漁獲尾数と 7 月～12 月の漁獲尾数の関係式から来遊量は前年を上回ると予測される。

西湘では、0 歳魚と 1 歳魚（2023 年級群）が漁獲の主体となる。1 月～6 月の 0 歳魚漁獲量と 7 月～12 月のマアジ総漁獲量には一定の関係性が認められている。1 月～6 月の 0 歳魚漁獲量は前年並であったが、今期の予測値は豊漁であった前年の漁獲量を下回るので、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

（4）房総以北の漁獲情報

房総～鹿島灘海域における北部まき網の 2024 年 1 月～6 月の漁獲量は 1,000 トン（TAC システム）と、前年同期 359 トンを上回った。今期の予測期間中、1 そうまきはマイワシ、サバ、スルメイカを対象とした三陸海域以北での操業が中心となり、マアジは漁獲の主な対象とならない。千葉県の 2 そうまき網によ

る漁獲が中心となる。

仙台湾以北では、宮城県の2024年1月～6月の漁獲量は306トン、岩手県の2024年1月～6月の定置網による漁獲量は29トンと前年を上回った。青森県では2024年1月～6月の漁獲量は6トンとなり、前年並であった。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し (2024年8月~12月)

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、底曳網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：0歳魚（2024年級群）、1歳魚（2023年級群）、2歳魚（2022年級群）、

3歳魚（2021年級群）、4歳魚（2020年級群）、5歳魚（2019年級群）、

6歳（2018年級群）以上。

年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバを主体とするサバ類全体としては前年並～下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、北薩～薩南海域では20cm～36cm（0歳魚～3歳魚）主体、日向灘～豊後水道南部では20cm～32cm（0歳魚、1歳魚）主体、土佐湾では30cm～38cm（3歳魚～5歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバを主体とするサバ類全体としては前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバが主な漁獲対象となり、27cm～31cm（1歳魚、2歳魚）主体に20cm～25cm（0歳魚）も漁獲される。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに低水準。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは15cm～25cm（0歳魚）主体に、ゴマサバは30cm～37cm（1歳魚～3歳魚）主体に漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を下回る。ゴマサバ全体としては低調であった前年を下回る。サバ類全体としては低調であった前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、三宅島周辺海域、銭洲海域にも漁場が形成される。

(3) 魚体：ゴマサバは29cm～37cm（2歳魚、3歳魚）主体に、24cm～31cm（1歳魚）および33cm以上（4歳以上）も漁獲される。

5. 犬吠埼沖～三陸海域、道東海域（まき網、定置網、底曳網）

(1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を上回る。5歳魚は前年を下回る。6歳魚は前年並。マサバ全体としてはまき網では低調であった前年並～下回り、定置網では前年を上回り、底曳網では前年並。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては低調であった前年並～下回る。

(2) 漁期・漁場：定置網、底曳網では期を通じて漁獲される。まき網漁場は、8月～10月は道東～三陸北部海域、11月～12月は三陸北部～常磐海域に主に形成される。

(3) 魚体：マサバは23cm～36cm（2歳以上）主体に、20cm～28cm（1歳魚）も漁獲される。

漁況の経過（2024年1月～6月）および見通し（2024年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、加入量水準の極めて高い2013年級群の発生により2013年に急増した。その後、資源量は2014年をピークに減少傾向を示している。2013年級群の発生以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2018年級群（6歳魚）は、2023年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が103億尾と近年（2013～2022年）の平均（92億尾）程度の水準である。

2019年級群（5歳魚）は、推定加入量が39億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020年級群（4歳魚）は、推定加入量が77億尾と近年の平均程度の水準である。

2021年級群（3歳魚）は、推定加入量が130億尾と近年の平均を上回る水準である。

2022年級群（2歳魚）は、推定加入量が75億尾と近年の平均程度の水準である。

2023年級群（1歳魚）の加入量は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6月～7月）、北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所、9月～10月）および再生産関係から、近年の平均を下回る水準と推定されている。

2024年級群（0歳魚）は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査における出現率が17%であり、昨年の同調査より低い値であることから、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、近年の平均を下回る水準と見込まれる。

2) ゴマサバ

資源量は2004年～2011年に高い水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2022年の資源量は、資源量を推定している1995年以降で最低水準となっている。

2019年級群（5歳魚）は、2023年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が2.4億尾と近年の平均（3.8億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2020年級群（4歳魚）は、推定加入量が2.8億尾と近年の平均を下回る水準である。

2021年級群（3歳魚）は、推定加入量が1.9億尾と近年の平均を大きく下回る水準である。

2022年級群（2歳魚）は、推定加入量が3.4億尾と近年の平均程度の水準である。

2023年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均を下回る水準と推定されている。

2024年級群（0歳魚）は、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、漁獲が低調に推移していることから、近年の平均を下回る水準と見込まれる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

（1）来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0歳魚（2024年級群）は、これまで得られている情報から加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年並。1歳魚（2023年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2022年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。3歳魚（2021年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準であり、来遊量は前年を上回る。4歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。5歳魚（2019年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。6歳（2018年級群）以上の来遊量は前年並。全体の来遊量は前年並となる。資源評価では資源水準は依然として高いと推定されているが、2022年の秋以降、

黒潮続流の顕著な北偏が継続しているため、特に犬吠埼以北海域のまき網で極めて低調な漁況が継続している。魚群の南下は 2023 年と同様に極めて遅れる可能性があることから、マサバの来遊量は三陸海域では前年並、犬吠埼沖～常磐海域では前年を下回る。ただし、黒潮続流、暖水塊および親潮の影響により漁況は左右される可能性がある。三陸海域の定置網では前年を上回り、三陸海域の底曳網では前年並となる。伊豆諸島周辺海域以西への来遊量は低水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1 月～6 月の漁獲量は、犬吠埼以北海域のまき網は 1.0 千トン（前年同期実績 8.2 千トン）、犬吠埼以北海域の定置網、底曳網等は 16.2 千トン（同 18.9 千トン）、伊豆諸島周辺海域のたもすくい・棒受網は 3.1 百トン（同 5.6 百トン）、伊豆半島～駿河湾～熊野灘のまき網・定置網は 1.2 千トン（同 1.4 千トン）、紀伊水道外域～北薩海域の全漁業では 2.2 千トン（同 5.3 千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1 月～6 月の魚体は次のとおりであった。犬吠埼以北海域のまき網では、1 月～4 月は 25 cm～28 cm の 2 歳魚が主体に、20 cm～25 cm の 1 歳魚および 25 cm～37 cm の 3 歳以上も漁獲され、5 月、6 月は 20 cm～25 cm の 1 歳魚主体に漁獲された。三陸海域の定置網では、1 月は 32 cm～39 cm の 3 歳以上が主体に、2 月、3 月は 25 cm～39 cm の 1 歳魚～6 歳魚が主体に、4 月は 28 cm～34 cm の 2 歳魚～5 歳魚が主体に、5 月、6 月は 32 cm～39 cm の 3 歳以上が主体に漁獲された。三陸海域の底曳網では、1 月～4 月は 24 cm～32 cm の 1 歳魚～3 歳魚が主体に、5 月、6 月は 27 cm～37 cm の 2 歳以上が主体に漁獲された。産卵場である伊豆諸島周辺海域では主に伊豆諸島北部海域が漁場となり、29 cm～39 cm の 3 歳以上が主体に漁獲された。駿河湾～北薩海域では、伊豆諸島周辺海域と同様の組成に加え、30 cm 以下の 0 歳魚～2 歳魚も漁獲された。

本予測期間は、犬吠埼以北海域のまき網、定置網、底曳網での漁獲が中心となり、2 歳以上が主体に 1 歳魚も漁獲される。まき網漁場は 8 月～10 月は道東～三陸北部海域に、11 月～12 月は三陸北部～常磐海域に形成されるが、魚群の南下は 2023 年と同様に極めて遅れる可能性がある。三陸海域の定置網、底曳網では期を通じて断続的に漁獲される。

伊豆諸島周辺海域以西への来遊量は低水準ではあるが、熊野灘では 0 歳魚主体、紀伊水道外域では 1 歳以上主体、豊後水道南部、日向灘では 0 歳魚、1 歳魚主体に、散発的な漁獲がみられる。

漁獲の主体となる犬吠埼以北海域の年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1 歳魚：20 cm～30 cm 前後、2 歳魚：23 cm～34 cm 前後、3 歳魚：26 cm～36 cm 前後、4 歳魚：28 cm～38 cm 前後、5 歳魚：30 cm～39 cm 前後、6 歳以上：32 cm 以上。0 歳魚は伊豆諸島以西で主に漁獲され、例年の傾向から 15 cm～25 cm 前後と予測される。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている）

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0 歳魚（2024 年級群）は、直近までの漁況を考慮すると加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。1 歳魚（2023 年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2 歳魚（2022 年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。3 歳魚（2021 年級群）は、加入量が近年の平均を大きく下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。4 歳（2020 年級群）以上は残存資源量が少なくなっており、漁獲の主体とならない。ゴマサバの来遊量は、北薩～薩南海域、日向灘、豊後水道南部、土佐湾では前年並～下回り、伊豆諸島周辺海域では低調であった前年を下回る。紀伊水道外域、熊野灘、犬吠埼以北海域では混獲される程度にとどまり、全体としては低調であった前年並～下回り、低水準の来遊量となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1月～6月の漁獲量（全漁業）は、北薩～紀伊水道外域は6.1千トン（前年同期実績9.8千トン）、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は2.6千トン（同4.2千トン）、犬吠埼以北海域は1.9千トン（同1.1千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1月～6月の漁獲の主体は、北薩～薩南海域では0歳魚～3歳魚、日向灘～豊後水道南部では1歳以上、紀伊水道海域では2歳魚、熊野灘では2歳以上、伊豆諸島周辺海域では2歳魚～4歳魚、犬吠埼沖～三陸海域では0歳魚～5歳魚であった。

本予測期間における各地の漁期・漁場と魚体は、北薩～薩南海域では0歳魚～3歳魚主体、日向灘～豊後水道南部では0歳魚、1歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、熊野灘では1歳魚～3歳魚主体に、それぞれ期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、伊豆諸島北部海域を中心に2歳魚、3歳魚主体に1歳魚、4歳以上が混じり、期を通じて漁場が形成されるが、黒潮流路によつては三宅島周辺海域、銭洲海域にも一時的に漁場が形成される。犬吠埼以北海域のまき網、底曳網では混獲される程度にとどまり、定置網では一時的にまとまとった漁獲がみられる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。0歳魚：20cm～25cm前後、1歳魚：25cm～32cm前後、2歳魚：28cm～35cm前後、3歳魚：30cm～37cm前後、4歳以上：33cm以上。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合つてゐる）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
宮城県水産技術総合センター	高知県水産試験場
福島県水産海洋研究センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
茨城県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
千葉県水産総合研究センター	宮崎県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター	鹿児島県水産技術開発センター
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産・海洋技術研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
三重県水産研究所	